

[様式14]

(対象事業：子どもを対象とした事業及びその開発にかかる事業)

事業名：和紙文化を生きて伝えるー  
八雲塾「子ども教室」

事業者名：財団法人 安部榮四郎記念館

連携事業館名：松江市教育委員会、松江市内小学

校・中学校、八雲小学校・八雲中学校

八雲町 PTA 協議会、八雲町公民館

島根大学教育学部・松江市教育委員会

住所：島根県松江市八雲町東岩坂1754

TEL：0852-54-1745

FAX：0852-54-1745

HPアドレス：



#### ①施設概要

安部榮四郎記念館は、昭和58年10月に開館。国の重要無形文化財 雁皮紙保持者であった安部榮四郎（1902～1984）が、和紙の普及と後継者育成を目的に設立したものである。展示室では、榮四郎の収集した和紙に関する研究資料、日本各地の和紙・世界の手漉き紙、紙布、紙衣、こより細工など和紙の製品を展示。また交友のあった作家河井寛次郎、浜田庄司、バーナード・リーチ、棟方志功など個性あふれる作品も展示している。記念館に隣接する手漉き和紙伝習所では、手漉きの紙漉き体験も出来る。

#### ②事業の意図目的

安部榮四郎記念館では、日本の誇れる文化「和紙」を伝え広める事業を行っている。今回の事業では、地域の身近な博物館として、主に親子で参加できるワークショップを開催し、和紙に触れる機会を多く作った。

特に子どもたちの自由な発想と創造力により、遊び道具から本格的な照明作りまで今の生活に役立つものが出来た。

そして、伝統工芸を生きた形でも伝え続けることが出来た。

また、地域の指導者や、大学生のボランティア参加で、世代交流が出来、地域の人と人を結び、ミュージアムを中心にした地域の活動となった。

### ③事業概要

地域のミュージアム（博物館）として、松江市の小・中学生を中心に和紙を作る体験や和紙を生かした造形に挑戦した。普段体験できない出雲民芸紙が出来るまでの工程を体験したり、古くから伝わる伝統技術を守る奈良県吉野町の宇陀紙や島根県三隅町の石州半紙など本格的に流し漉きを指導してもらい、伝統工芸を伝える「心と技」も学んだ。

また地域の方を指導者に、親子でも参加出来る和紙の可能性を引き出すワークショップ「もの作り」をした。子供たちが、当記念館で和紙はもちろんのこと、地域の方と交流する事により、生きる知恵、生きる技も学び、博物館をより身近なものとして楽しく交流できた。

そして、安全面や子どもの活動補助員に、ボランティアとして島根大学教育学部大学生を受入れたが、参加者にも好評で活動全般が活性化し明るくなった。

### ④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物	テキスト	ワークシート	その他（	）
作成した報告書等				
ビデオ	（			）
冊子	（	実施報告書		）
その他	（			）

### ⑤参加者状況

参加者人数 延べ 194 人

内 訳      大人70名      小学生・中学生 124名



## (1) 事業の実施状況について

### 1. あそび発見！自然を集めて「万華鏡・森の動物と昆虫作り」

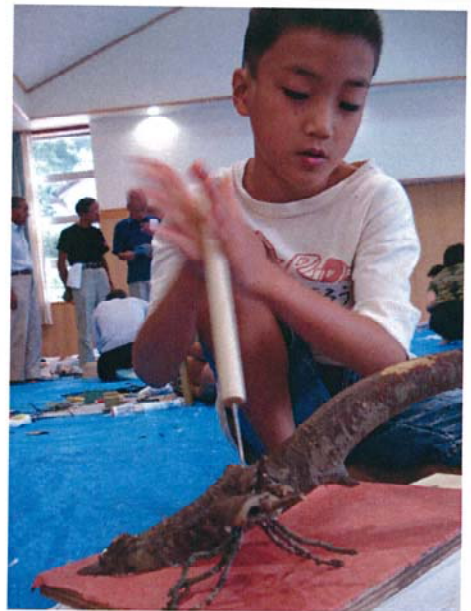
開催日時 平成19年8月4日（土）、9：30～14：30

開催場所 八雲町 ほほえみ会館

参加者 小学生とその保護者 小学生15名 大人8名

#### 事業内容

八雲町は自然の宝庫。夏本番の外に出て、山や川原から自然を集めました。枝、木、石、竹・・・そして出雲民芸紙を大いに利用し彩りを加えました。テーマを決め合板に和紙を張り、森の中を想像して集めた材料を使って、昆虫や動物を組み立てます。当然、形に近づけるのに木や竹を切ったり削ったり。子どもたちは、小刀、のこぎり、錐、釘に金槌なども使い大工さんのようでもありました。出来ないところは、保護者や大学生ボランティアグループが手伝い、想像力を発揮し挑戦しました。和紙は昆虫の、羽になったり、森や池、葉っぱにもなりました。お昼の休憩には万華鏡の中に、石や葉っぱを入れて自然の不思議も体験。子どもたちの小さな森は庭のようでもあり、また物語を感じました。今回は和紙の役目が、自由な発想の中で一役！書く材料から工芸の主役的素材として使ったのは、子どもたちの中で印象に残ることだったようです。揉んだり、ちぎったり、丸めたり・・・よく工夫されていました。作ることの楽しさの中で、刃物の使い方、便利さも学ぶことが出来た。（写真：きりを使って穴あけに挑戦）



### 2. 和紙と竹で「ぜったい上がるたこ作り」

開催日時 平成19年9月29日（土）、9：30～14：30

開催場所 八雲町 ほほえみ会館

参加者 小学生とその保護者 小学生10名 大人9名

#### 事業内容



たこ作りは、良くあるが、準備されたものではなく、地域の高齢者の方が、子どもの時に作って遊んだ地元で伝わる「たこ」を作り、たこあげ大会までするものです。形は同じものだが、墨や絵具を使って絵を描き個性あるたこになった。たこは、糸の調節、和紙の丈夫さ、竹のしなりなど多くを学べる遊びで、昔からの知恵を伝える良い機会となった。

（写真：親も子も初めて作るたこ、地域の指導者に学びました）



### 3. 伝統工芸 WASHI を学ぶ・・・心と技

開催日時 平成19年10月21日（日）、10:00～15:00

開催場所 安部榮四郎記念館 手漉き和紙伝習所

参加者 小・中学生とその保護者 子ども25名 大人15名

事業内容

地元の出雲民芸紙（安部信一郎）、奈良県吉野町の宇陀紙（福西弘行）、島根県三隅町の石州和紙（川平正男）から講師を招き、古くからの紙産地で今もなお守り伝えられている各産地の技法、伝える職人の気持ちなどを学ぶ講習会です。講師より各産地の和紙の特色など話を聞き、各産地の本格的な流し漉きを体験した。3種3様の和紙は、気候風土から生まれ、漉き方や用途の違いなど身を持って学んだ。また、三角染め、墨流しなど染色も体験した。  
（写真：本格的な流し漉きを体験しました）



### 4. 自分だけのカレンダー作り

開催日時 平成19年12月15日（土）・16日（日）、  
9:30から4:30

開催場所 ほほえみ会館

参加者 小・中学生とその保護者 子ども20名 大人3名

事業内容

型染めで平成20年の手作りカレンダーに挑戦した。自分でデザインし、渋紙に写し取り、デザインカッターで彫り、和紙に刷毛で直接色をつける捺染をした。デザインを型染め用にデフォルメしていくのが難しく、低学年は切り絵やちぎり絵で装飾した。中学生や高学年は、丁寧に彫って染め完成させた。月の数字は困難だったので、版画用のカレンダー台紙を使用し、和紙に型染めしたものを、4枚くらい重ね、1年間楽しめるようにした。2日間で完成させる予定であったが、集中して作業し、1日で完成させる子が多かった。2日目は色違いのものを作ったりし、家庭で1年間「自分のカレンダー」を楽しんだり、祖父母にプレゼントすると張り切って作れた。

（写真：型彫りで、うろこを丁寧に彫りました）



## 5. くらしを彩る「和紙で明かり作り」

開催日時 平成20年1月19日（土）、9:30～14:30

開催場所 ほほえみ会館

参加者 小学生とその保護者 子ども25名 大人15名

### 事業内容

八雲町の竹と和紙を使い、保護者と協力し本格的な照明を作った。竹ひごを組んで照明の枠を作り、和紙を貼ったり、かぶせたりして、和紙のあかりを作った。

普段扱う事のない危険と思われる小刀やささくれだった長い竹に苦慮しながらも、出来た時の達成感、和紙を通したあかりの暖かさや美しさを感じる事が出来た。暮らしの中で生かせる伝統工芸作品となった。和紙は色和紙を使い、「春」をテーマに個性を引き出せた。

(写真：長い竹を組み枠作りをしました)



## 6. 和紙ってどうして出来るの？

三桮皮はぎから紙すきまで

開催日時 平成20年2月10日

開催場所 安部榮四郎記念館 手漉き和紙伝習所

参加者 子ども34名 大人20名

### 事業内容

和紙の原料の1つ「三桮」は、落葉した冬に木を刈り取り、皮をはぎ保存する。紙漉きのときは皮を処理するあらゆる工程を必要とするが、皮の長い繊維を使って漉くので丈夫な紙になる。三桮の皮はぎは、冬の風物詩といえる。



この事業は、古式にのっとりまず皮を剥ぎやすくするため、三桮原木を地元に伝わる「こしき」という高さ180cmの大きな蒸し器で蒸し、皮はぎをする。その皮をもとに紙作りに挑戦。竹へらで黒皮をそぎ白皮にする→皮を煮熟→水で灰汁だし→木槌で叩いて繊維にする叩解→叩解した紙料を水にとき紙漉き→乾燥仕上げまでを体験した。地域のボランティアと協力した作業は世代交流が出来、また和紙の出来るまでを学ぶ貴重な体験となった。

(写真：蒸した三桮の木から皮を親子で協力してはぎました)



## （２）地域との連携について

講師・指導者はほとんどが、安部榮四郎記念館を取り巻く地域の方で構成し、ミュージアムタウン構想の事業内容に添って理解し、協力を得た。このことは、今回の事業にも、また今後の事業を円滑に進める上で、重要な収獲であった。

教育関係者との連携では、松江市教育委員会・公民館と連携し、市内小学校・中学校に広報できた。また、地元の小学校・中学校とは先生を通じて、学年単位で地域の伝統工芸「出雲民芸紙」や安部榮四郎のことを学ぶふるさと学習に参加でき、これからの広がり期待できる。

そして島根大学教育学部で行われている基礎体験活動は、学校の先生になる学生の1000 時間ボランティアで、当記念館も受入れ事業所として大学で説明会に参加している。島根大学教育学部の学生ボランティアは、子どもの安全面と作業の補助をお願いし、事業を安心安全に進めることが出来た。

外部では、和紙業界から講師として著名な方たちを呼び、人柄に触れることで、技術だけではなく伝統工芸を伝える心を学び取る事が出来た。

## （３）成果物について

### 実施報告書

## （４）参加者の反応

あそび発見、たこ作りは、和紙を切ったり張ったり、絵を描くなど比較的楽しい作業が多く、子ども達は楽しかったという意見が多かった。あかり作りは、子どもだけでは出来ない作業も多く時間もかかったが、出来た作品に対しては好評だった。紙漉き体験や三極皮はぎに関しては紙を作る苦勞も学べた事と感じた。

以下アンケートより抜粋

紙になるまで大変な作業が多い事が分かった。苦勞して作った紙なので大事に使います。紙漉きが1 番面白かった。時間が長くて寒かった。小さい子どもには、少し難しい作業が多いです。

久しぶりに作る楽しさを味わった。子どもより夢中になった。

小刀で竹を削るのが難しかった。おじいさん（指導員）に教えてもらって嬉しかった。のこぎりをはじめて使って「楽しかった。もう少し回数を増やして欲しい。昔の人は自分で作っての遊びが上手だと思った。

子どもが小刀を使い、最初はひやひやした。でもやれば出来るものと感心しました。

和紙を貼ってすてきなあかりになったことが嬉しかった。

もう少し簡単かと思った。

親子で物づくりが出来て楽しかった。小さな子でも出来る作業があったので、退屈せずによかった。

## （５）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

地域博物館が地域で活動する事の意義を、改めて考えるきっかけになった。そ

して新たな挑戦として、活動する機会をもらった。

地域の住民が指導者やボランティアとして参加する事により、住民と博物館との距離を縮めることが出来た。八雲町の過疎化は少子高齢化の現状が進んでいるが、今は元気な高齢者が多く、この活動で世代交流が出来た事は、地域に住む安心感につながっている。そして、学校・教育関係者とつながりができ、学校側の要望も含めお互いに意見を交換し、学校教育に博物館利用を提案することが出来た。今後、学校側と協力体制で活動が広がるよう期待できる。

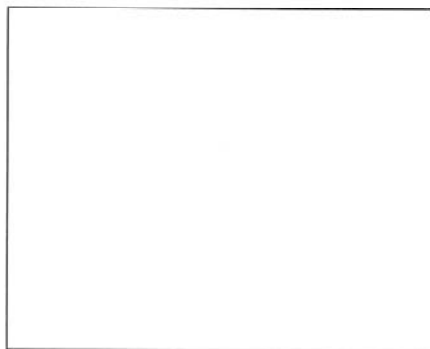


(6) 新聞記事等  
○新聞記事



和紙を使った「たこ作り」に取り組む親子

山陰中央新報新聞（島根ワイド版）平成19年9月30日 22面



昔ながらの和紙作り

安部栄四郎 家族連れら体験 松江 八雲町

昔ながらの和紙作りを「きまで」が十日、松江市の八雲町の安部栄四郎記念館であった。家族連れや

は魅力があり、開設のいれ、交流再開に向けて歴い時期になったと判断し、尚北道の知事に働き掛け「た」と経緯を説明。「韓国の首都圏から山陰に観光客が訪れるようにしたい」と、交流促進の懸け橋になる意向を示した。一方、二〇〇五年三月の「竹島の日」条例制定を契機に交流が途絶えていた。尚北道と島根県との関係については、懸念はコンテナが百―百五十の席上、賛否両論が起る。個個積み込めるとい

大学生など約七十人が、江戸中期から伝わる「ミツマタ」の紙を、この時期に刈り取るのに合わせて毎年開いており、十八回目。参加者は、こしきという道具で煮したミツマタの皮をほぎ、竹へらで黒

い皮をそぎ落とす。その後、煮た皮を小づちでたたき、粘りのある紙液になる。液を作り、はがき作りに挑戦。折れたという木枠



昔ながらの方法でオリジナルのはがき作りに取り組む参加者―松江八雲町、安部栄四郎記念館

山陰中央新報新聞 平成20年2月11日 25面

同様の新聞記事

読売新聞 平成20年2月11日 23面  
中国新聞 平成20年2月11日 24面

の道具を使って漉き用の紙料液をゆっくりすくい、仕上げにハート形の和紙を載せ、オリジナルのはがきを作った。家族四人で参加した出雲市瀬橋町の藤原崇さん（35）は「皮をたたいたの



山陰中央新報新聞 平成20年2月11日 25面

同様の新聞記事 読売新聞 平成20年2月11日 23面

中国新聞 平成20年2月11日 24面

○テレビ，関連誌等

山陰ケーブルビジョン放送「マーブル地域ニュース」

平成20年2月15日より1週間繰り返し放送

放送時間15分間

島根県文化振興財団発行 情報誌19年7月号から平成20年2月号まで

「Catch」催し物情報に掲載

島根県立生涯学習推進センター発行「レッツ」平成20年1月・2月号

特集冬を楽しもう「八雲塾 子ども教室」を掲載